

「また、若き若尾文子の作品から三島由紀夫さらには石原慎太郎、そして最近の映画から」

まだ、若尾文子から抜けきれぬところから今回取り上げる作品は、増村保造監督『からっ風野郎』（1960年）です。筆者はこれまで見ることを避けてきた作品で、当時文壇の寵児である三島由紀夫とはいえ、素人芸を見せられるのは何とも辛いと予想したためであり、その予想通り演技は拙いもので若尾文子が出演していなければおそらく見ることはなかったと思います。東大法学部で同窓の増村保造でなければ統率できないと考えた大映ですが、増村監督の厳しい演技指導があったことはよく耳にしますが、素人俳優としては安藤昇の方が数段上だったというべきでしょう。若尾文子を始め、志村喬、水谷良重、山本礼三郎といった名優たちで脇を固め、船越英二、川崎敬三といった若手大映スターも顔を揃え、殺し屋役の神山繁も不気味に登場します。菊島隆三のオリジナル脚本もしっかりした構成で、三島由紀夫を全面的に支える態勢が十分伺えます。（脚本は安藤日出男との共作）

あるヤクザの一家の二代目で、知性・教養・感性の欠片も感じさせない粗暴な男を演じる三島由紀夫は、映画という擬似世界の中で自身と対照的な役柄を演じることに喜びを見出しているようにさえ思えます。ナルシスト的要素の強い三島由紀夫にとっては映画は自らの主義・主張を明確に伝達することのできる媒体であったと考えられ、その後『憂国』（1966年）の製作・主演、『人斬り』（1969年五社英雄監督）への出演に繋がっていくものと考えられます。若尾文子は、このヤクザの縄張りの中の映画館のモギリの役ですが、三島演じるヤクザより気の強さを見せる芯のある女性像を表現します。文士（小説家もしくは作家というよりは）としての三島由紀夫の作品で映画化されたものといえば、本作が公開された1960年までに『潮騒』『金閣寺』の二本があります。また、1956年に『太陽の季節』で芥川賞を受賞し、その映画化を始め数多くの映画化作品を残し、その上自ら主演・監督を果たした作家に三島由紀夫より七歳年下の石原慎太郎という存在があり、三島由紀夫と対峙していたように思えるのです。三島由紀夫と石原慎太郎との関係は、1968年までは常に親密であり、互いを認め合う建設的なものでした。1968年に何が起ったかといえば三島由紀夫が「楯の会」を結成し、石原慎太郎が参議院選挙で300万票という大勝で国会議員になった年です。『からっ風野郎』を見たタイミングで「三島由紀夫 石原慎太郎全対話」（中公文庫）を読んだせいだとも思いますが、三島由紀夫は石原慎太郎を意識、もしくは対抗心を抱いていたのは明白であり、1970年11月25日の三島由紀夫の割腹自決事件の後の石原慎太郎の三島評は実に批

判的なものでした。すでに半世紀以上も前に起こった三島事件は、2000年1月号の「文藝春秋」のミレニアム記念特別企画「20世紀における20大事件」の集計結果で「1945年8月15日の敗戦」に次いで2位にランクされたほどの事件でした。このとき1998年に芥川賞を受賞した1975年生まれの平野啓一郎が、生まれる5年前に起こったこの事件を1位に挙げ、「戦後という時代の終わりを決定づけた事件、戦後日本が抱えた虚無（ニヒリズム）が極限に達した事件」と評したことを覚えています。石原慎太郎は、「結局あの人（三島由紀夫）は全部バーチャル構造だったね。最後の自殺劇だって政治行動じゃないしバーチャルだよ」と言うが、それだけでは片付けられない深層が潜んでいたことは明確です。

話は『からっ風野郎』から外れましたが、はずれついでに石原慎太郎と映画の関係について述べてみます。1958年から1957年にかけて、東宝では石原慎太郎を作家としてだけでなく「青春スター」として売り出そうと、3作品で主役に抜擢します。『日蝕の夏』（1956年堀川弘通監督）『婚約指輪（エンゲージリング）』（1956年松林宗恵監督）『危険な英雄』（1957年鈴木英夫監督）といった作品ですが、筆者も未見の作品です。このように、石原慎太郎は東宝にとって「自社の映画に何本も主演してくれた大物スター兼原作者」という極めて密接な関係にありました。だからこそ、東宝の上層部は「これだけ貢献してくれた慎太郎の『映画を監督してみたい』という要望なら」と「助監督経験のある者にしか監督をやらせない」という厳格な徒弟制度のルール破ってまで監督起用に踏み切ります。これに対して、外部の人間である石原の抜擢に東宝助監督部の47人全員が署名・捺印し、辞表を提出して4ヶ月にわたり激しく抗議しました。事態の収拾を図るため、東宝上層部は助監督たちの反発をなだめるため、急遽生え抜きの助監督だった岡本喜八と須川栄三の二人を監督に昇格させます。そして、最終的に組合側が折れる形で制作が進み、石原慎太郎の初監督映画『若い獣』は1958年7月12日に無事公開されます。是非みてみたい作品であります。因みに監督排斥騒動が解決した後の1960年、川島雄三監督の『接吻泥棒』（制作は東京映画ではなく東宝本体）では、原作者である石原慎太郎が本人役で登場するというカメオ出演を行なっています。また、1962年には、フランス・イタリア・西ドイツ・ポーランド・日本の五カ国合作のオムニバス作品『二十歳の恋』の日本編のオリジナル・シナリオと演出を委嘱されたことも付け加えておきなしょう。フランスからはフランソワ・トリュフォー、ポーランドからはアンジェイ・ワイダーの参加した作品でした。石原慎太郎の興味はやがて政治へと向きを変えていき、1968年の参議院選挙の勝利へとつながり、長い政治家としての歩みを文筆活動と併せて進んでいくことになります。石原慎太郎の辛辣な三島評を読む

と正鵠は得ているものの、故人の文学的業績に対しての非礼とも言うべき言辞に、石原慎太郎自身の抱えていた特権的意識の発露を感じるところです。

吉田恵輔（1975～ ）は、『ヒメアノヘル』『空白』『ミッシング』など、衝撃作や高い評価を受ける作品を多数発表し、日本映画界で確固たる地位と基盤を築いた監督の一人ですが、新作『四月の余白』（2026年）もそれなりのパワーを備えた一作です。偶々本作を見た前日にトニー・ケイ『アメリカン・ヒストリーX』（1998年）を見たところでもあり、その比較論からすれば、日本の現代の不良少年たちの背後にはイデオロギーや思想的なものが大変希薄であり、ヴァイオレンスの背景にある動機の質的な違いが鮮明に浮かび上がってきます。彼らを動かしているのは、その場の”ノリ””空気””退屈しのぎ”あるいは自分がコミュニティの中で優位に立ちたい、または排除されたくないという極めて内向的で狭い人間関係の力学のように思えてしまいます。彼らのヴァイオレンスや悪意の背景には文字通りの空白状態が広がり、だからこそ罪悪感が希薄で、加害者たる自身も何故そこまでやってしまったのか説明の出来ない不気味さが付きまといまいます。この構造的な欠陥とでも言うべき暗雲が世間を覆ってしまう恐怖は、今そこにある危機と呼べるでしょう。トニー・ケイ『アメリカン・ヒストリーX』の場合、ナオ・ナチもしくは白人至上主義という偏った思想からの良心の回復、改悛の情の重要性を訴える反面、本質的な解決に向けての主張が希薄で、差別に対しての報復という悲劇のループの記録に止まっているところに強い不満を感じます。アメリカ映画にはこの手のものが多いのですが、それだけ抱えている問題の多さが浮き彫りにされます。しかし、根本的な解決ができず一層分断の進む可能性の高さを示すだけです。『シヴィル・ウォー』（2024年アレックス・ガーランド監督）や『ロング・ウォーキング』（2025年フランシス・ローレンス監督 原作はスティーヴン・キング但しリチャード・バックマン名義で発表）に繋がるものとも考えられます。基本的に描かれる近未来はディストピアでしかないようです。吉田恵輔の描く問題の発生とその悲劇のループは一つの記録ではあるものの、そこでもがき苦しむ人たちの姿こそは、その解決の糸口になるのかもしれないという希望を抱かせるものです。善悪だけでは割り切れない人間の愚かさや弱さをリアルに描く姿勢が一層際立った作品と感じました。